

令和6年度 教育課程特例校 取組のまとめ

1 取組の内容

(1) 校内研究のテーマを下記のように設定し、研究を行った。

英語科において

豊かにコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

～目標・指導・評価の一体化と言語環境の工夫を通して～

(2) 研究の視点

視点1 目標達成に向けた単元計画

視点2 評価の方法・内容

視点3 言語環境の工夫

を取組の柱として、取り組んできた。

2 取組に対する評価

(1) 児童の評価（アンケート・リスニングテスト結果）

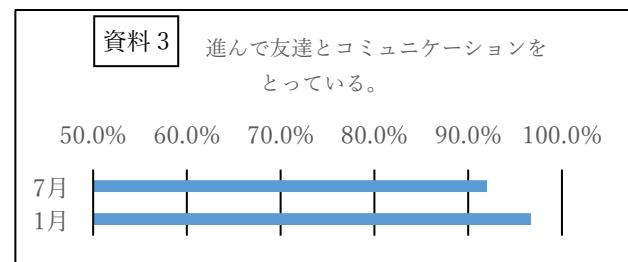
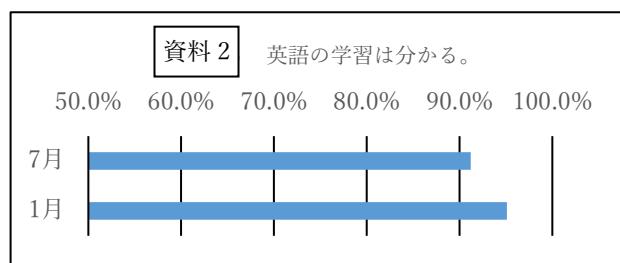
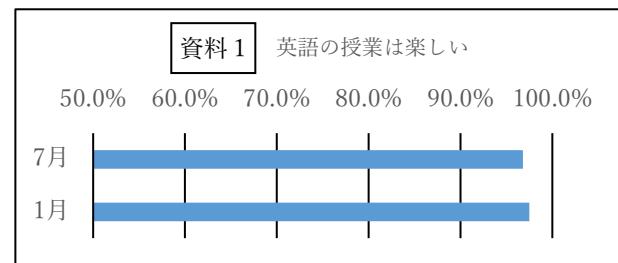
【児童は豊かにコミュニケーションを図れたか】

① 児童意識調査の結果から

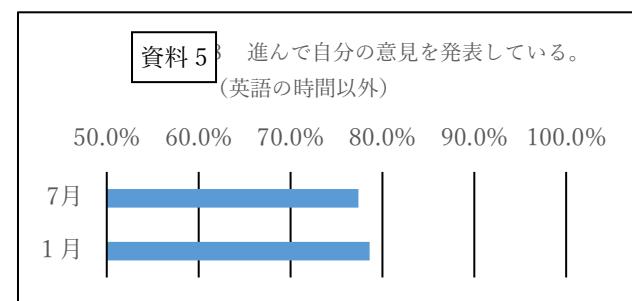
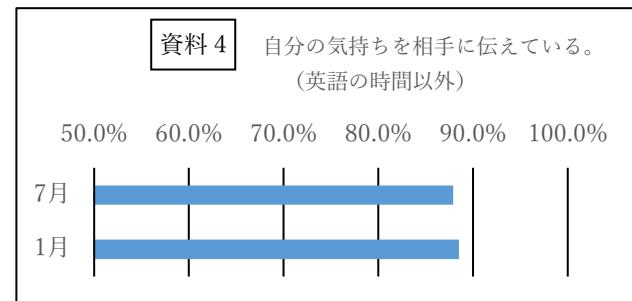
※「とても」と「だいたい」を合わせたプラス評価の割合

児童が豊かにコミュニケーションを図るうとするためには、その土台となる英語への関心の高さや基本事項の理解が必要である。児童意識調査の「英語の授業は楽しい」については、1月の段階で、「とても」と「だいたい」と肯定的な回答をした児童が97.5%と7月と比較して0.7%の伸びが見られる（資料1）。また、「英語の授業は分かる」についても、1月の段階で、95.1%の児童が「とても」あるいは「だいたい」と回答し、3.9%の伸びが見られる（資料2）。英語への関心や基本事項の理解は、7月の段階でも高い数値だったが、更に高めることができた。

次に、実際に豊かなコミュニケーションに結びついているか、児童意識調査の結果を見てみると「進んで友達とコミュニケーションをとっている。」については、1月の段階で、96.7%の児童が「とても」あるい

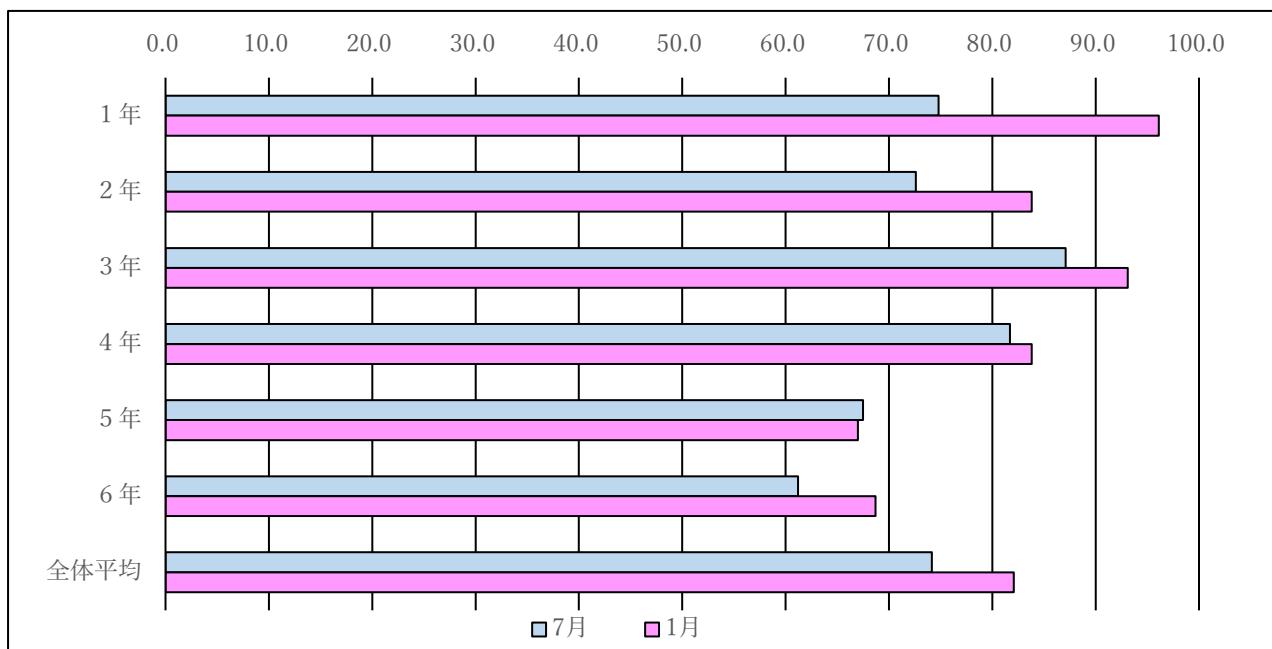


は「だいたい」と回答し、7月と比較したら4.7%の伸びが見られる。(資料3)。また、「自分の気持ちを相手に伝えている。(英語の時間以外)」については、1月の段階で「とても」あるいは「だいたい」と回答した児童が88.5%おり、7月と比較して0.6%の伸びが見られる(資料4)。さらに、「進んで自分の意見を発表している。(英語の時間以外)」については、1月の段階で「とても」あるいは「だいたい」と回答した児童が78.6%おり、7月と比較して1.2%の伸びが見られる(資料5)。英語を使ったコミュニケーションだけでなく、英語以外の時間でも自分の意見や気持ちを伝えていることが分かる。



②リスニングテストの結果から

児童が豊かにコミュニケーションを図ることができるようになるためには、相手が伝えたことの概要を理解する必要がある。そこで、本校では、4～6年生は「英検Jr.」の「リスニングテスト」を、1～3年生は自作のリスニングテストを行い、7月と1月の変容を見ることで、コミュニケーション能力が向上したかどうかを確認した(資料6)。

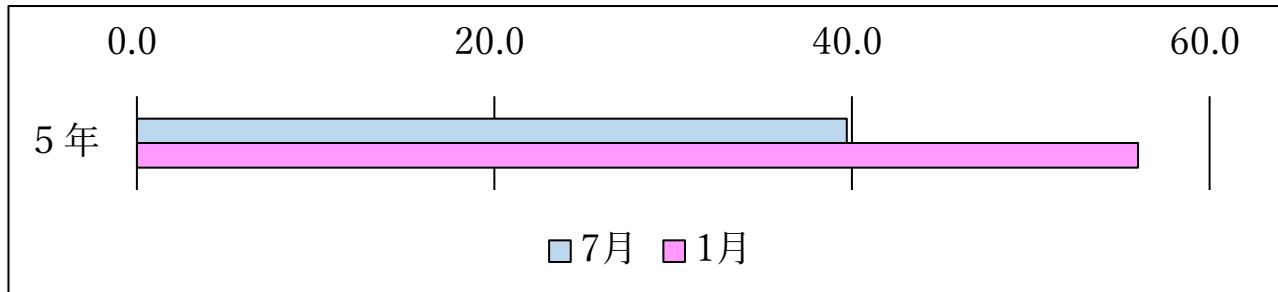


資料6 リスニングテスト結果(正答率)

資料からも分かるように、学年の伸びに違いこそはあるが、第5学年を除くと7月よりも1月の方が正答率が高くなっている。また、全体を平均したら、7.9%の伸びが見られた。

また、また、資料7は、第5学年の「単語の絵と同じものを選ぶ（複数回答）」という問題の結果である。7月に課題が見られた問題に16.3%の伸びが見られた。

こうした結果から見ても分かるように、どの学年においてもコミュニケーションの基礎となる「聞く」ことに関する能力の向上がうかがえた。



資料7 第5学年リスニングテスト 単語の絵と同じものを選ぶ問題（複数回答）結果

これらの結果から、コミュニケーションの基礎となる「聞く」ことに関する能力が向上したと言える。

② 児童の日頃の様子から

英語コーナーの設置や毎週水曜日の「英語を使おうデー」、学習したことを発表する場を設定することで、児童は日常的に英語に慣れ親しむことができた。また、ハロウィンやクリスマス等の外国のイベントを体験的に学ぶことができ、より英語への関心を高めていた。

（2） 教師による評価

- 事前研を実施し、相談しながら授業づくりができ、とても勉強になった。
- 英語の授業に少しずつ自身がもてるようになった。
- 指導と評価を意識した授業作りは、他の教科にも生かすことができた。

（3） 学校運営協議会の評価

- 低学年から英語の授業が実施され、いきいきとコミュニケーション活動をしていて、とても良いと思う。地域でも、外国の方と会う場面が出てきて、これからますます英語を話す力が大事になってくるだろう。
- 高学年の英語の授業を見たが、よく英語で話をしていた。6年間の積み重ねの成果だと思う。